

労働文化運動の 展望



早稲田大学 社会科学部 教授
篠田 徹

はじめに

筆者への本特集の寄稿依頼は以下の通りである。すなわち、「労働文化運動の展望」をテーマに、まず労働組合運動と文化芸術の関係を軸に、労働と文化芸術が互いにどのように影響しあい、どのように労働文化を形成してきたのかをふりかえったうえで、コロナ禍で希薄となったコミュニケーションやつながりの再生に向け、労働文化が労働組合活動や社会において果たす役割と可能性について考察されたい。筆者はこれを、連帯文化の再興とそれに基づく連帯社会の再建を考えることと解釈した。

連帯文化や連帯社会の定義は、それをを用いる者によって異なり、一様ではない。けれども官民あげてしきりに「お互い様」「支え合い」といった言葉がとびかう今日この頃、その意味するところが連帯文化や連帯社会と大きくずれるものではない。

ありていに表現すれば、それは経済の低迷、政治の混乱、社会の変容が絡みあって生まれた貧困や格差が広がり、人びとの繋がりがほつれてしまった私たちの世界をなんとか逆回しにしたいという、多くの人に分ちもたれた願いだ。

ただこの願いに労働運動が応えるべきであるという思いをもち、それにはどうしたらいいかという問いをたてることは、いまの世の中で「残念ながら」かならずしも皆がうなづくことではない。

それは去年と今年と大幅賃上げがつづき、それにマスコミや世間が沸いても、やはり労働運動ががんばらないと世の中はよくなるという話になかなかならないことからわかる。

だからいまみじくも「残念ながら」とつぶつたところに、本当は皆にそう思っしてほしいという気持と、だからこそなんとかしたいという特集企画者の意図を汲みつつ、その意図とはおかしな話になる

かもしれないが、筆者の考えを以下に述べる。

1 文化芸術とは

これから書くことは、いまこの国の人びとに親しまれていることではない。したがって、あくまで筆者はこう考えるというのを言葉の意味からはじめる必要がある。

まずいっておかねばならないのは、物事の意味するところについての筆者の但し書きである。

研究者の間では、「社会的、歴史的構成主義」という難解な学術用語を用いるが、そのポイントは「場所と時代も違えば、同じ言葉やそれが指す対象の意味もちがう」ということで、「もうそんな言い方しませんよ」とか「そういう考え方は古いですよ」という日常会話で私たちが意識するとしなやかにかかわらず、理解していることである。

つまり物事やそれを表現する言葉の意味は、そこでそのとき生きた人たちがつくるということだ。その場合、当然それぞれに言葉使いや意味するところはちがうはずだが、ある場所と時代には、それが特定化される。なぜか。大きな声を出す人がいれば、それに従う者もいるからだ。つまり物事の意味や言葉使いは、その時々の人びとの間の「力関係」で決まる。そしてこの力関係は人種、民族、階級、ジェンダー、性など多岐にわたる。

こういう考え方にたつて「文化芸術」を論じる時、その意味が時代や場所によって変わってきたこともより腑に落ちるのではなからうか。

今年が典型だが、大河ドラマや時代劇などで「文化芸術」を堪能しているのは、地位と名誉、権力や富をもつ人びとやそれと関係を持った人たちであり、画面に登場しない庶民にとってその世界はあずかり知らぬこと、つまり「お呼びでない」ことになっている。

では「庶民」の生活に「文化芸術」はなかったのか。確かに特権階級の「文化芸術」を味わうことはほとんどなかったと思うが、「庶民」には彼ら彼女らの「文化芸術」があったはずである。ただ特権階級はそれを「文化芸術」とは認めず、また「庶民」もそう思っていなかったかもしれない。

もっとも特権階級の文化芸術と庶民の文化芸術は、それぞれの生活にとって意味もちがえば当然中身もちがった。

アメリカの制度的経済学の始祖のひとりであるソースタイン・ヴェブレンやイギリスの民俗的社会主義者ラスキン、モリスが雄弁に論じたことだが、特権階級の文化芸術とは要は力の誇示のために用いられ、それは余裕の証しとして、強大な力により獲得された希少な品やパフォーマンスを浪費する奢侈に費やされる。それに対して庶民の文化芸術は生活の役にたつものであり、とりわけ毎日の大半を占めた労働のより良い遂行とそのエネルギーの再生産のためのひとときの息抜きに見いだされた。この対比の象徴を、たとえば宝石と石壁や宮廷音楽と労働歌とすれば、その意味するところもより実感できよう。

この文化的序列観は、かつては特権階級と庶民の一方にだけ賞味されてきたものが、多くの人には選択や好みの問題になっている今日でさえ残っていて、ブランド品と日用品やクラシック音楽と民謡などの間のように、それにかかるコストやそれをまかなえる人の「懐具合」すなわち所得や資産によってあきらかに線引きされている。そしてブルデューが指摘するように、この文化的嗜好の差異は階級化の指標ともなっている。

このように、今日の消費文化のなかにもかつての奢侈文化の名残があることは確かだが、それにしても、文化芸術の対象も意味も以前にくらべれば格段に拡大し多様化し、それぞれの間の序列観がうすれ、水平的な選択の問題になってきたことも確かだ。

そしてこれに大きく貢献したのが、労働運動による階級間格差の縮小であり、それにとまなう文化芸術の大衆化であることも間違いない。今度は、この労働運動と文化芸術の関係、とりわけ労働文化と労働者文化運動についてみていこう。

2 労働文化、労働者文化運動、労働運動

「労働文化」というのは、人によって「働き方」を意味したり、「労働組合の文化運動」をさしたりという

ように、その言葉の用い方は様々だが、筆者は「助け合い分ち合い」という価値観を大切にした労働者の生き方暮らし方」と解している。これはオリジナルな考えというより、長年職場で行っている「ポピュラーカルチャーの社会科学」という授業で、多くの受講生が共有している考え方であることを発見することで、たくさんの学生から毎年「教えてもらっている」ことである。

この授業は、働くとはどういうことかを表現していると思われる映画をジャンルを問わず何本か選んで、内容や描写に即してその理由を説明してくださいというレポートの提出をお願いしているが、示しあわせた訳ではないと思うが、毎年、先に示した労働観を描く作品の紹介が少なくない。

実際、確かに働く意味はまずは食べていくことであり、できればそれによって豊かな暮らしができることだとする学生も少なくないが、同じ学生が、同時に働くことを助け合い、分ち合いを学びそれを実践していく行為ともとらえるところがなんとも興味深い。

本稿ではこれに「文化」という言葉を足しているのだが、この場合、文化は「生き方暮らし方」を意味する。これも筆者が独自に考え出したことではなく、以前アメリカン・スタディーズというカルチュラル・スタディーズの先進分野の先生が「Culture is a way of life」といついたのを聞いて、なるほどと思いついて以来使わせてもらっている。

したがって、「労働文化」というのは、労働者による助け合い、分ち合いの生き方暮らし方すべてが含まれる。

そしてここからは特異な考え方かもしれないが、労働運動とは、労働文化を「耕し育てる営み」だと思っている。

以前の筆者は、労働運動とは、「賃金、労働時間、住宅、社会保障といった労働生活条件に関わる部分」とそれを実現するために必要かつ有益な「連帯的な価値観・世界観に基づく政治的、社会的土壌を豊かにする部分」の両輪で解釈しており、後者を「労働文化」と考えていた。

そして時代や場所によって、この労働文化の運動部分が、労働組合が直接間接に関わった労働者文化運動ということになる。

そしてこうした労働運動観で筆者も、多くの実践家や研究者らとともに、その最盛期を二〇世紀の前半から後半にかけて欧米を含めて世界の多くの国々にみだし、日本の一九五〇年代から七〇年代にかけても、世界でもまれにみる興隆をみたと理解していた。

たとえば戦後日本の政治学者の最高峰のひとりである高島通敏氏は、一九七九年の日本政治学会年報『五五年体制の形成と崩壊』で、一九五〇年代から七〇年代までの総評・社会党ブロックを、労働運動を中心に農民運動、学生運動、女性運動、消費者運動、平和運動、市民運動、文化運動などにわたる実に広範かつ多様な政治社会運動の連合体にとらえ、それが率いた「革新」の国民運動のメカニズムを分析し、なかでも次のような裾野部分に注目した。それは映画・演劇・舞踊・美術・文学・学術など各分野にわたる広汎な文化団体の活動とそことなんらかの関係をもちながら、同好の志が自主的に集まって「職場や組合組織を網の目のように埋めていた活発なサークル活動」という労働者文化運動総体のことであった。

個人的には、これを総評・社会党ブロックに限定せず、当時これと競合、対抗していたグループも含めて考えるべきだと思うが、こういう強力な労働者文化活動を含めて労働運動が大いに発展した時代があったことに大いに同意する。

ただ筆者は、これを運動分野として考え、暗黙のうちに、この労働運動の心(文化)を育てる部分と体(労働生活条件)を育てる部分を、それぞれの分野を担当する者や機関が特定されると考えていた。

だから、かつて労働者文化活動を担っていた教宣部の衰退や変容を嘆きながらも、それなしでも不十分ではあるが労働運動自体はなりたつものと考えていた。しかし今は、実際にはそれは分野や部門ではなく、労働運動に不可欠な機能であり、同時にこの労働文化醸成の運動や活動は、労働運動のすべての分野や部門で担える、あるいは担うべきものであることと考えている。それを教えてくれたのが、アメリカ労働運動の歴史と今である。

3 知的活動の労働化と文化機構としての労働運動

総評・社会党ブロックをはじめとする戦後日本の労働運動の原型であり、また人的、知的系譜、すなわち「血筋」からいっても「兄弟姉妹」の関係にあり、さらには部分的にでもその意志を継いだのが、一九二九年の大恐慌後からニューディールを通じて形成され、民主党とともに一九七〇年代まで繁栄の時代を築いたアメリカの労働運動であるというのが筆者の持論であるが、その日米の関係性についてはまた稿を改めるとして、ここでは労働文化的視点から一九三〇年代以降今日までのアメリカの労働運動

について考えてみたい。

フォークソングをはじめいわゆる労働者文化運動が盛んになったのは、一九三〇年代にそれまで資本とその意を体した政府と司法に抑え込まれていた労働運動が、ルーズベルト政権が導入した産業復興法とその後のワグナー法で労働組合の組織化が一気に進み始めたのに伴うことだ。

ただその一方で、失業対策が文化労働者をも対象にし、資本主義再建には労働の積極的な物心両面の支持が不可欠と考えた政府が、アメリカ労働文化の多種多様な称揚に彼ら彼女らの動員を図ったのも大いに影響がある。

ただアメリカの労働者文化活動の特徴は、それがアメリカの労働者の組織化のツールであり、それがやがて彼ら彼女らのライフスタイルに組み込まれていったところにある。

前者はやはり歌であり、これはそれ以前からアメリカのラディカルな労働組合は、新入りに組合員証と共に歌集を渡していたほどで、一九三〇年代の組合集会ではフォークシンガーが必須で、シンギング・レーバームーブメントと呼ばれたその活動は独自のレーベルまでもつにいたっていた。

他方で組織化で多用されたのはレクリエーションやエンターテインメントで、ボーリングとラジオ放送はその必須アイテムだった。ちなみにひとこ、アメリカをはじめ先進国における人と人の繋がり希薄化を研究してアカデミックなベストセラーになったパットナムの本のタイトルは、筆者のつたない訳で恐縮だが『ひとりでボーリングかよ』である。

こういう労働運動や社会運動の組織化ツールがその対象となった人びとの日常生活の一部になるものをアメリカでは、ムーブメント・カルチャーと呼ぶが、こういうプロセスをより広い文脈で考えた人に戦後アメリカの代表的な社会学者のひとりであるライト・ミルズがいる。

彼は未完成の遺稿となった著書のなかでそれを論じているが、要は現代人の経験というものは、実際に自分でするよりも、はるかに多く他人によって経験され解釈されたものを通じて行われ、その解釈をつくり伝えるのが、教育、文化、メディア、企業、行政、団体などの各種組織であり、それを「文化機構」と呼んだ。

さきのムーブメント・カルチャーの話は、当時は労働組合や労働運動も、戦後アメリカの文化機構の一翼を担っていたということだ。

そしてここからが大事なところなのだが、アメリカ文化研究者のデニングが指摘したように、それまでどちらかというと一人親方や個人芸、職人業とし

て行われることが多かった、先にあげた文化機構の仕事、いわゆる精神労働が、第一次大戦後から次第に、とりわけ一九三〇年代以降急速に「労働化」、すなわち仕事の内容も「工場労働」のようになり、それにともない従事する人も「文化労働者」になり、さらにそのサービスを受取る人のなかに労働者がたくさんいるようになるということである。

つまりその分野や職場に労働組合があるかどうか、またその分野や職場に関係する労働者文化運動があるかどうかにかかわらず、アメリカ文化という壮大かつ広大なテリトリーが、潜在的に労働運動が組織化の対象にしうるものになり、そこにおける労働文化のありようが、アメリカ社会全体に大きな影響をあたえかねない非常に戦略的なフロンティアが広がったということになる。

ここで思い出してほしいのが、去年から今年にかけてハリウッドで俳優や脚本家のストライキが長く続き、番組に穴が開いたり、映画が撮れない状況となり、日本でも話題になったことである。

このストで組合側が獲得したAIに関する組合員の交渉権は、それまで賃上げなど労働の対価のみ要求し経営の専権事項に手つかずだったアメリカ労働運動にとって画期的なことで、これ自体また別稿が必要な大事な事柄だが、それはここではおいておき、このハリウッドの組合が、戦前ハリウッドをはじめアメリカの映画産業誕生の頃からあり、その組織化範囲はアニメ製作を含めエンタメの生産現場の各種職種に及び、その影響力はかつてレーガン大統領が俳優組合の委員長であったように非常に強力でありつづけているということだ。

最近の日本の芸能界やテレビ、映画、アニメの職場の残酷物語の原因を考えると、太平洋をはさんだエンターテインメントの世界には、すくなくとも労働者の組織化という点で雲泥の差があることに気がつく。

4 労働文化運動のメーンステージとしての組織化

アメリカのこの文化機構で、あらゆる意味において最も重要な場所になっている大学が、いまのアメリカの労働運動でもっとも組織化が成功しているところなのである。

アメリカの大学では、ハーバード、MIT、コロンビア、UCバークレーなど日本の人でも名前はきいたことがあるだろうが、特に研究教育分野でトップクラスの大規模校で、大学院生の組合がのきなみ結成され、

ストライキを行い、大学と労働協約を結んでいる。

なぜなら彼ら彼女らは大学の研究、教育を下支えする労働者であり、この人たちなしには大学は回らないにも関わらず、しかもその労働からは高い高い授業料と莫大な研究成果が生まれるのに比して、地域の最低賃金程度しか払われていない。

数年前までこれら大学院生の組織化は、「労働者」や「労働組合」という世界になじまないのを理由に困難が続いた。

けれどもその職場はおそらくさまざまなハラスメントにまみれ、それを我慢させてきた「大学の先生」になるという将来も望み薄となる一方で、多様な人たちが大学院生となってお互いに知らなかった世界が共有され、また未来が危うい世界に生きる世代として「世直し」に強い関心を持っている。

その彼女ら彼らが、組合という労働文化を見いだしたのである。ここでは、組織化や組合活動自体が「助け合い、支え合いの価値」を体現する労働文化であり、交渉や集会、ストやピケが文化活動なのだろう。

このことに気づいたとき、筆者は先に述べた労働者文化活動は労働者や労働運動のいかなる場所にも宿ることを理解した。

つまりアメリカの最新最強の労働文化と、これまで最も労働組合が苦手とされてきた超高学歴の若者、とりわけ女性による労働者文化活動は、「組織化」なのである。

ちなみに最近の調査によれば、アメリカ国民の組合に対する支持率は六十七パーセント、これだけでも史上最高といわれるが、若年層は七十七パーセントである。いまや労働運動はアメリカ若者文化のひとつの象徴といっている。

この話をしながら、職場の学生たちのことを考えている。彼女ら彼らはみな働いている。立派な労働者だ。けれども誰一人組合員ではない。その職場の正社員やパートタイマーには組合があってもだ。

学生たちから働いていて楽しかった話を聞かなくなった。ゼミはもはや労働相談に近い。日本の学生たちはいま労働文化に飢えている。彼女ら彼らに組織化の手がのびたらどう反応するか。最初は様子見、次におっかなびっくりだが関りをもち、最後にはのめりこむ者もいるのではないか。きっとアメリカの大学院生もそうだったのだろう。

おわりに

それにしても、アメリカの大学院生が集会やストやピケで歌を歌っているのだろうか。けれども組織

化には歌がつきもの。アメリカには運動歌がたくさんある。ちなみにヨドバシカメラのコマーシャルソングのメロディ自体は、もともとはアフリカン・アメリカンのゴスペルソングの歌詞をかえて、アメリカの組合員ならだれでも知ってる「ソリダリティ・フォーエバー」と同じである。

これも職場の大学院生から聞いた話だが、パク・クネ大統領を辞任に追い込んだ韓国のロウソク運動の主題歌は、若者の間で絶大な共感を呼んだテレビドラマのテーマソングだったらしい。

かつて日本でもベトナム反戦運動盛んになりし頃は反戦集会でフォークソングが合唱された。これはもともと組合がサポートしていたものである。最近は皆で声をはりあげる歌がなくなったと思ったら思い出した。

東日本大震災の際にタレントたちがしきりに歌った「上を向いて歩こう」は、安保闘争に敗れた国民にエールを送ろうとして、「こんにちは赤ちゃん」で日本で初めての口語歌を作った永六輔が作詞し、歌声運動の中村八大が作曲し、民謡歌手だった坂本九がはやらしたものだ。